

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話21

「北方領土」という言葉を

知らない道民はいない。

しかし、元々誰が住んでいたのかは、
どれほど知られているのだろうか？



オホーツク文化と擦文文化^{さつもん}

北海道の大部分の地域で擦文文化が栄えていた千三百年ほど前、北海道・サハリン・千島列島には、日本やロシアなどという国家は一切存在しなかった。サハリンと千島列島に住んでいたのは、オホーツク人と呼ばれる人々で、彼らは常呂など道東のオホーツク海岸でも暮らしていた。

擦文人は、縄文人・続縄文人の子孫とみられるが、オホーツク人は擦文人とは違う。サハリン方面から南下してきて、北海道のオホーツク海岸や千島列島に進出してきた人々だ。

十世紀頃になると、道東地方ではオホーツク文化と擦文文化が一つになったトビニタイ文化が起り、それがやがて擦文文化に吸収される。その擦文文化も十三〜十四世紀頃には、アイヌ文化へと変化していく。オホーツク人が消え、アイヌ民族の住む地域は、北海道・サハリン・千島列島へと広がっていった。

国を持つ人々の侵入

そこに「国を持つ人々」が入って来た。日本人とロシア人だ。

日本人は十二世紀末あたりから、海産物の交易を求めて北海道の南部に来るようになり、アイヌの人々との交易を行った。十五世紀には、武田信広が「コシャマインの戦い」に勝利し、蝦夷地での地位を築き、その後松前氏が松前半島を支配する。アイヌの人々とは交易の利益などをめぐって、

「シャクシャインの戦い」をはじめ、何度も戦いが起きた。もともと暮らしていたアイヌの人々が、新たにやって来た「国を持つ人々」を嫌い、抵抗したためだ。

一方、千島列島にはロシア人が住み始め、一七六五年に千島のウルップ島まで足を踏み入れた。当時千島にいたのはアイヌ民族。毛皮を求めて南下してきたロシア



蝦夷漫画 松浦武四郎「弾弓式」(北海道大学附属図書館所蔵)

人に対し、一七七二年、国後島・択捉島のアイヌの人々がウルップ島で戦いを挑み、勝利を得る。以後、ロシア人は暴力的な進出をやめ、ウルップ島に向いて交易するようになった。アイヌの人々が南下してくるロシア人を、ウルップ島・択捉島の間で防いでくれたのだから、日本にとってもありがたいことであった。

松前藩の場所請負人も交易船を国後島に出したが、同島のアイヌの人々がこれを追いつめた。しかし、自給自足の暮らしに限界が訪れ、一七八二年にやむなく交易船を受け入れる。最初に交易を行った飛騨屋久兵衛は過酷なアイヌ使役を行った。脅しによって魚肥製造に駆り立て、越冬のための食料を準備する暇もないほどに酷使したため、アイヌの人々の生活は飢餓に瀕した。たまたま一七八九年、アイヌの人々はクナシリ・メナシの戦いを起こす。しかし、蜂起したアイヌの人々は、松前藩の兵が到着する前に降伏し、恭順の態度で臨んだもの

の、松前藩は中心的なアイヌ三七人を死刑に処した。その後、日本の交易船は択捉島まで行くようになる。

日本とロシアで領土画定

ロシア人がウルップ島まで南下してくると、徳川幕府は最上徳内・近藤重蔵などの役人を北方の島々に探検させる。

一七九八年、近藤たちは択捉島に「大日本恵登呂府」の札を建てた。しかし択捉にいたのはアイヌの人々だけで、日本人が住みついてはいたわけではない。そこに日本人が住んでいれば、「日本領」を示す札を建てる必要もなかったはずだ。

一八五五年には、日本とロシアが話し合いによって「日露和親条約」を締結する(この後はすべて戦争によって「国境」が決まる)。しかし、条約の中には、そこに住むアイヌの人々の意思は全く入れられていない。



蝦夷漫画 松浦武四郎「エトロフ人 男女の図」(北海道大学附属図書館所蔵)

さらに一八七五年、「樺太千島交換条約」により、従来両国人雑居としていたサハリンをロシア領に、千島列島のうちウルップ島以北の島を日本領とした。この条約により、北千島のアイヌ民族はロシアによって大陸に、日本によって色丹島にそれぞれ移住させられた。さらに悲惨なのは、サハリンアイヌのうち、北海道に移住した人々の多くが伝染病で亡くなってしまったことだ。「国を持つ人々」の条約によって、アイヌの人々は他の土地に移され、大きな苦しみ味わうことになったのだ。

もともと北方領土一帯に住んでいたのは、アイヌの人々。小集団で地域を形成し、自然のものを採取しながら、豊かな暮らしを育んでいた。北方領土問題を考える時、平和に暮らしていたアイヌの人々を、「国を持つ人々」が追い出したという悲しい歴史を忘れてはならないのではないだろうか。

「国を持つ人々」の条約により、アイヌの人々はもともと暮らしていた土地を追われることになった。

あつろの 杜 装丁家 佐々木正男さん

Interview

表紙・見返し・扉・カバーなど一冊の本の造形をデザインするのが装丁家。今回は『こんな夜更けにバナナかよ』をはじめ数々の装丁を手掛けている佐々木正男さんのお話です。

ブックデザイナー

元々は広告やパンフレットを作る制作会社にいましたが、昔はコンピュータが無かったですから、版下(紙に印字した文字や図版を貼り付けた印刷の原版)をびっしり仕込まれました。今は当時とやり方が全く違い、便利になったけれど、反面何か軽いですね。

装丁というのは、古い時代には絵の描ける人がやっていた。僕は絵を描きませんが、この装丁の仕事を、二十年ぐらい前に自費出版などから手掛け始めたんです。書店で販売する本の装丁をやり出したのは、ここ十年ぐらいですね。

北海道は出版社が少ないので、本を作る機会も限られている。だから広告系のデザイナーはたくさんいるけれども、本の編集をするデザイナーも少ないと思います。広告のデザインとは違い、書籍は製作のスパンが長いし、製本などいろいろな知識が必要な特殊分野だと思います。経験者の少ない中、僕がたまたまや

原則は余計なことをしないこと...



佐々木正男
ささき まさお

1962年生まれ。デザイン専門学校卒業後、印刷所、制作プロダクションを経て、2011年に佐々木デザイン事務所として独立。書籍・雑誌などのエディリアルデザインを中心として活動している。【主な仕事】『おっぱいの詩』講談社(映画化)、『こんな夜更けにバナナかよ』北海道新聞社(大宅賞・講談社ノンフィクション賞)、『監獄ベースボール』亜細亜社(サムライジャパン野球文学賞)、『アイヌモシリ・北海道の民衆史』中西出版(日本自費出版文化賞大賞)、『北の無人駅から』北海道新聞社(サントリー学芸賞・早稲田ジャーナリズム大賞)など多数。



き、「面白いな。これはやっていけそうだ」と感じたんです。

装丁は面白い

チラシなど一枚ですが、本はぐるりと回す背表紙があつて、裏表紙があり、袖もある。立体的に考えるから面白いんですよ。

ゲラをもらって中身に目を通してから、明朝がいいのかゴシックがいいのかなどの装丁を考えます。フォントは山のようにあります。が、使うものは大体決まっていますね。活版時代からある書体が好きなので、できるだけそれを使うようにしています。

あと材料が文字なのか、写真なのか、絵なのかを探し、どうする

か考えますね。予算のこともあるので制約がありますが、ハードカバーにするのかソフトカバーにするのかとか、紙やインクは何を使うのかとか、ポスター・チラシなどをやっているデザイナーとはまた違う、面白さがあります。

表紙回りは帯も含めて作ります。売るときにはどうしても帯が必要なんです。取ると間が抜けてしまふし、図書館では取られてしまふ。この帯の扱いが考え所で、なかなか難しい。

中西出版でやった『学力危機北海道』という本は、新聞にずっと掲載されていたもので、写真など材料はいろいろありましたが、それを入れずに文字だけで組んでみようかと思ひ、本文の文章を抜き書きにした表紙にしました。先生方の声などがいろいろ出ているので、それをチョット拾って表紙回りに展開すれば、少しは中身が想像できるんじゃないかと、文字で組むタイポグラフィのデザインにしたんです。どの文を入れるのかは僕が抜き出しました。

基本的には、自分を出してはいけないのかな、という気がします。表紙であまり中身をあらわしてしまつと、読む前に固定観念ができてしまふじゃないですか。それはしたくない。結論が見えてしま

う表紙は、読む人に対して失礼か。なつて。できれば想像してもらいたい。

一番理想的なのは文庫本です。余計なデザインをしていなくて、読みやすい。あの装丁はすごいと思いますね。

本を残す責任

装丁で守っている原則は、余計なことをしないこと。若い頃には、自分の爪跡を残そうといういろいろやりました。その時の気持ちは分かるんだけど、今見るととても恥づかしい、というものが結構あるんです。本というのは残るので、たとえ自分の本棚から抹殺しても図書館などに行くところを置いて、恥づかしい思いをする。

最近、五十年史や百年史などの記念史もやらせてもらっています。が、五十年史は次の百年史を作る時、それを参考にするじゃないですか。その時に「適当なことをやっているな」と言われたくない。僕はもういないけれど、名前は残っていますから。やっぱり残す責任というのがある。この仕事の難しいところは、本は残るものだというところですね。だから最近余計なことをしないで、ちゃんと残せるものをしっかりと作ると思っています。

ヘンナ語

公園などにはよく「犬のフンをしなさい下さい」という注意書きがあります。言いたいことは充分に分かるのですが、考えてみると実に不思議な文章なのです。

こういった注意書きを見かけると、「私には犬のフンなんかできない」「何のフンならいいんだ」と言いなくなってしまう。「犬にフンをさせないで下さい」という意味なのでしょうが、ほんの少しの文章の狂いによって、言っていることがヘンになっているのです。

「ネコの缶詰あります」

こんな紙が貼られている店があり、「えっ、ネコの肉の缶詰があるの？」とビックリしたことも。しかし、もう一枚の張り紙を見ると、そこには「ネコの砂あります」という文章が。そうです。「ネコ用の缶詰」という意味なんですね。

もしこの店で、人間が食べる缶詰も扱うようになったとしたら、こわいですね。その時は「人間の缶詰もあります」と書くのでしょうか。

また、ビルの中のトイレには、こんな張り紙がありました。

「トイレを汚した人はきれいにふいて下さい。これは最低のマナーです」

よく見かける間違いです。これ、「最低の」ではなく「最低限の」と言うべきですね。

これと似たもので、あるスーパーにあった張り紙。「万引きは立派な犯罪です。ダメとは言いませんが、褒めているようにも解釈できます。「れっきとした犯罪」とでもしたほうがいいのですが、これって「万引きは犯罪です」でいいのではないのでしょうか。

ほかにも、こんな錯誤が…。

「短期アルバイト募集! ※なるべく長く働ける方」
あるコンビニの張り紙でした。

OWLINFORMATION

北海道の「書」が一望できる展覧会

第42回北海道書道連盟展

11月5日(火)～10日(日) 10:00～18:00(最終日は16:00まで)
ギャラリー大通美術館(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビルディング1F TEL 011-231-1071)
大丸藤井セントラル7F スカイホール(札幌市中央区南1条西3丁目2 TEL 011-231-1131)
入場料/無料

使用する紙選びから墨の濃淡、筆運び、余白の構成…。書道は知れば知るほどに奥深い美の世界です。

北海道の書道団体の代表などで構成され、来年には創立60年を迎える北海道書道連盟が、毎年恒例の展覧会を今年も開催します。42回を数えるこの書展は、各分野を代表する書道家による作品約240点が出品され、北海道書道の現在を一望できる貴重な機会。2008年からは会場を二箇所に分け、ゆったりと鑑賞できるようにしました。

篆刻ややかなの小品から、漢字一文字を1mを超える紙にダイナミックに描く墨象まで書風も幅広く、題材も漢詩や古典、近代詩文と多岐にわたり、一つひとつ趣向を凝らした作品群は見る者を飽きさせません。

書の豊かな表情をこの機会にぜひご覧ください。



札幌市公文書館がオープン

札幌市公文書館

札幌市中央区南8条西2丁目(旧豊水小学校)
TEL 011-521-0205(公文書館)・011-521-0207(閲覧室)
開館時間/8:45～17:15
休館日/日曜、月曜、祝日及び年末年始(12月29日～1月3日)

札幌市がまちづくりの一環として準備を進めていた公文書館が、7月1日に開館を迎えました。市が作成・取得した文書のうち、特に重要なものの永続的な保存と閲覧のための施設で、政令指定都市では8番目の設置となります。

明治期からの公文書のほか、母体となった札幌市文化資料室が『新札幌市史』『さっぽろ文庫』の編纂などを通じて収集・保管していた書籍や郷土誌、貴重な古写真などの郷土資料も所蔵。収蔵資料は閲覧室の端末かホームページ上から検索可能で、申請すると館内で閲覧・複写ができます。

館内には常設展示室のほか、約90名収容の講堂を備え、古文書講座や学生向けの歴史研究講座を開催。文化資料室が行っていた郷土史相談にもこれまで通り応じており、市政を検証したり、札幌市のあゆみを調べる上で価値ある施設となっています。



廃校した豊水小学校の校舎を活用した施設。建物内には豊水まちづくりセンター、豊水会館も設置されている

低迷する北海道の学力。その深層に迫る

学力危機 北海道

教育で地域を守れ
読売新聞北海道支社・編
定価1,470円(税込)

国が実施する全国学力テストで不振が続く北海道。「2014年までに学力を全国平均以上にする」という道教育委員会の目標に、現場はどう動いているのか。校長や教諭、教育委員会の関係者と幅広く丹念な取材を重ね、苦闘する北海道の教育の課題と改革への提言を示しています。

「学力向上」がなぜ「勉強だけの子ども」という負のイメージで受け取られるのか。その根底には何があるのか。北海道の教育の深層に迫り、大反響を呼んだ読売新聞北海道版の連載「学力危機」を総括した1冊です。



中西出版 A5判、238頁
2013年8月刊行

体系的な指導理論構築の端緒を示す

アルペンスキー競技における技術・戦術指導

初級者及び中級者を対象とした教授プログラムによる実証的研究
近藤雄一郎・著
定価4,800円(税込)

アルペンスキー競技者の減少が懸念される今、普遍的で系統的な指導理論の確立が求められています。しかし優れた指導者の指導方法は、自己の競技実績や指導経験に基づく場合が多く、追試・実践が困難です。

本書は運動学習理論や教授学的理論からアプローチした科学的な指導理論の構築を目指し、初・中級者を対象に大回転種目の指導理論を展開。運動の構造分析に基づき作成した教授プログラムで実験授業を実施し、その結果から理論の課題と展望を考察、報告しています。



中西出版 A4判、276頁
2013年9月刊行

5図書カードプレゼント!

「あうる」49号読者の皆さまへ、
5名様に図書カード(1000円分)をプレゼント!

図書カードをご希望の方は、お名前、ご住所、お電話番号、ご職業、「あうる」入手場所、感想を添えて、中西出版までハガキまたはメールでご応募ください。

ご応募多数の場合は抽選となります。賞品は発送をもってかえさせていただきます。どうぞお楽しみに!



締切りは、
2013年11月30日まで

